

最終接尾辞 -ся について

— СВЕТИТЬСЯ - СВЕТИТЬ, ДЫМИТЬСЯ - ДЫМИТЬ の対立において —

加藤 敏

1. 相のカテゴリーについて

ロシア語動詞の相(залог)のカテゴリーに関しては、その定義、およびそれと密接に関連する具体的な分類に関して、意見の一致が見られていない。

《Русская грамматика》(以下「80年文法」と記す)では、相のカテゴリーが「能動-受動」に分類されているが(「80年文法」/§1455)、それ以前を見ると様々な分類法が採られてきていることがわかる。例えば、《Грамматика русского языка》では「能動相-被動相-再帰相」という三分法が採られており(《Грамматика русского языка》/§673-676)、また、それとは別に Фортунатов や Jakobson によっては、「能動-再帰」(正確には「非再帰-再帰」という二分法が採用されている(Фортунатов/1153-1158, Jakobson¹/7)。さらに時代を遡って、Ломоносов や Потебня を見ると、これらとは異なった分類法が採られている(Ломоносов/§269-275, Потебня/245-268)¹⁾。これだけでも、相のカテゴリーが Ломоносов 以来様々に解釈されてきていることがわかる。

また、最近採られている、相のカテゴリーを「能動-受動」に分類する二分法は、形態と意味の相関関係が明確ではないという欠点を持っている。つまり、普通「受動」を表現する方法として、動詞が完了体のときは被動形動詞の短語尾形が(Портрет написан художником.)、一方、動詞が不完了体のときには最終接尾辞 -ся (以下単に -ся と記す)の付いた形態(V-ся)が用いられる(Портрет пишется художником.)ということになっている(以下の叙述では、動詞に -ся の付いた形態をV-ся、また、それに対応する -ся の付かない形態をVと記す)²⁾。とはいうものの、動詞が不完了体であるにもかかわらず被動形動詞が用いられる場合もあり³⁾、また、Harrison によれば、動詞が完了体であってもV-сяによって「受動」が表現されることがあるとされ⁴⁾、そのような用法を持つ動詞が列挙されている(Harrison/15-21)。このように、「受動」を表現するために使用される形態は複数存在し、それに加えて、それらの形態の選択は、動詞の体のカテゴリーに関連して相補分布の様相をなしているというわけでもない。

以上の二点から、相のカテゴリーについて考える必要があることは明らかである。ところで、相のカテゴリーを考える場合、前の段落で触れた二つの形態のうち、より複雑な様相を呈するのは、「受動」（もしくは、被動）の意味のみを表す被動形動詞ではなく、それが付く動詞と一体になり、その動詞の語義（лексическое значение）によって、様々な語彙・文法範疇（лексико-грамматические разряды）を形成する -ся である。そこで、本稿は、特に V-ся - V の対立（3. を参照）における -ся の意味論的機能の解明を目的とする。

2. 非他動詞に付く -ся

一般的に、他動詞に -ся が付くことにより、その動詞は対格補語を支配することができなくなる、つまり動詞の他動性（переходность）が失われるということはよく知られている⁵⁾。とはいうものの、もともと他動性を持っていない非他動詞に -ся が付いた形態も、少数ではあるが確かに存在する。「80年文法」では、そのような形態について以下のような四つの場合が挙げられている（「80年文法」/ § 1470）。第一の場合、「非他動詞に最終接尾辞 -ся が結合することによって、語彙論的に最終接尾辞 -ся なしの動詞に近い動詞が形成される。（…）ある文脈では、最終接尾辞 -ся の付いた動詞において、動作の実現における集約性（интенсивность）、もしくは根気強さ（настойчивость）のニュアンスが現れる」とされ、そのような動詞の例として грозиться（脅す）、стучаться（ノックをする）、звониться（呼び鈴を鳴らす）が挙げられている。次に、第二の場合として、「最終接尾辞 -ся は、『何らかの色に見える』という意味を持つ非他動詞に付いて、動詞の意味に特徴の現れの不明確性（неопределенность）、もしくは弱々しさ（слабость）のニュアンスを持ち込むことがる」と記述されており、例として белеться（白く見える）、краснеться（赤く見える）、чернеться（黒く見える）が挙げられている。また、第三の場合には、「最終接尾辞 -ся は、非他動詞を主体の意思とは無関係に経験される状態を表現する無人称動詞のクラスに転換することがある」とされ、例として верится（信じられる）、плачется（泣ける）、думается（思われる）が挙げられている。そして最後に、「最終接尾辞 -ся は、種々の接頭辞と結合することにより、動詞の様々な語形成のタイプを造り出す」とされており、例として возгореться（燃え上がる）、вдуматься（熟考する）などが挙げられている（「80年文法」/ § 936-959）。

ところで、以上のような非他動詞から形成される V-ся の意味論的および統辞論的研究は非常に少なく、筆者の知る限りこれを中心に据えた研究はない。

しかし、純粹に -ся の本質を究明しようと思うのなら、上の第一および第二の場合として挙げられているような形態のペア、つまり、V-ся とVの間の意味論的差異の不明確なペアを比較・検討してみることは、意義のあることであり、ひいてはロシア語動詞の相のカテゴリーの構造の究明にも貢献できるように思われる。そこで、本稿では、上の段落で挙げた四つの場合のどれにも属さないと思われ、また、「80年文法」で採用されている「能動-受動」という二分法を用いる相のカテゴリーの研究の観点および同カテゴリーの類型論的研究の観点(Холодовичなどを参照(Холодович/277-292))からでは分析の網にからない светиться - светить (光る、輝く)の対立および дымиться - дымить (煙る、煙を出す)の対立における -ся を詳しく見てみることにする。

светиться - светить の差異に触れた研究は、筆者の知る限り Янко-Триницкая (Янко-Триницкая/234)、Мучник (Мучник/65)、および Gerritsen (Gerritsen/43-44)のみで、特に Янко-Триницкая と Мучник は、この対立を他の V-ся - Vの対立と関連のない特殊な場合として扱っており、理論的な記述は行っていない。一方、дымиться - дымить の差異を扱ったものは、筆者の知る限り、Gerritsen (Gerritsen/44-45)のみである。

Gerritsen は、正当にも светиться - светить の対立および дымиться - дымить の対立を同一のグループに属するものとしているが、その説明には本質を見逃した点があるように思われる。まず、彼は -ся の機能を次のように定式化する。つまり、「-ся は、-ся が付けられている動詞の主語に余分な役割 (extra role) を割り振る」と (Gerritsen/5, 11)。ちなみに、彼によって「役割」と言われているものは、二つのレベルで考えられている。それは、抽象的なレベルでは、文の意味構造の出発点 (starting point) および帰着点 (terminal point) であり、具体的なレベルでは、行為者 (agent)、使役者 (causer)、特徴 (property)、道具 (instrument) などである (ibid/14-15)。そして、抽象的なレベルでは、動詞がVのとき、主語が出発点の役割を対格補語が帰着点の役割を持ち、一方、動詞がV-ся のとき、主語は出発点と帰着点の両方の役割を担う。また、具体的なレベルでは、動詞がVのとき主語は一つの、動詞がV-ся のとき主語は二つの役割を担うというのである。これをもし図で表すとすると、図1のようになるであろう。

さて、この定式が светиться - светить の対立および дымиться - дымить の対立にも適用される。светить および дымить の主語が出発点および特徴 (property) の役割のみを持つのに対し、светиться および дымиться の主語は、出発点・帰着点の役割および過程主 (processor)・過程対象 (processed)

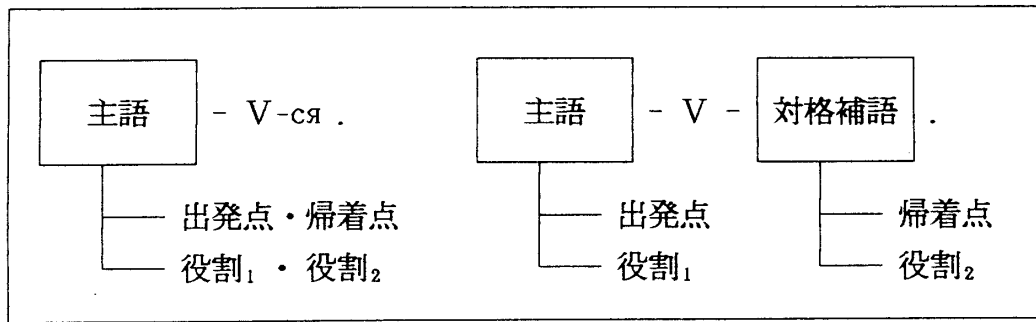


図1

の役割を担っているとされている。再び、これを図示すると、下の図2ようになるであろう。具体的に言うと、светить および дымить の主語は свет (光) および дым

(煙)を造り出すという特徴を持っているのみであるが、светить-ся および дымиться の主語は、それを放出すると

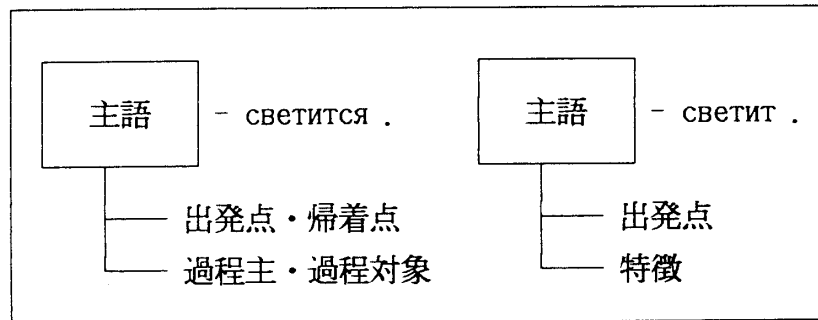


図2

いう過程主体であると同時に、その過程そのものにより「自らを見せる (show itself)」ため、その過程対象でもあるというわけである。

Gerritsen の記述には、多くの的確な指摘があるのであるが(これらの指摘については再び 8. で触れる)、基礎としている上に引用した定式は、3. 1. および 3. 3. に見る Jakobson の定式から導き出せるもので(これについては 3. 1. を参照)、また、V-ся - V の対立に部分的に適用することのできるもののように思われる。

3. 二項対立および他動性-非他動性

具体的な検討に入る前に、二項対立の概念と相のカテゴリーの関連、および他動性-非他動性という対立について簡単に触れておきたい。

3. 1. 二項対立

まず、二項対立と相のカテゴリーの関連は、Jakobson によって、次のように与えられている (Jakobson¹/7)。つまり、動詞の全ての形態は、「動作の非他動性を告示する形態 (有標)」と「そういった告示を持たない形態 (無標)」とに分けられる。これは、要するに、V-ся では動詞の非他動性が表示されるのに対し、Vはその非他動性を積極的には表示しないということである^{6) 7)}。ここから、2. で見た Gerritsen の定式も導き出されるものと思われる。つまり、V-ся とVを比較すると、Vの方がV-ся よりも補語を支配する可能性が遙かに高くなり、言語の使用者の注意はその名詞にも注がれるのが普通であり、反対にV-ся が用いられた場合、言語の使用者の注意は行き場が狭められ、V-ся の主語へと向かうということは十分に考えられるであろうから。

3. 2. 他動性-非他動性

以上の Jakobson の定式とも関連するのであるが、他動性-非他動性という対立にも触れておく必要がある。ロシア語では、一般的に、対格補語を支配し得る動詞が他動詞ということになっている。とはいうものの、状況はそう単純ではない。例えば、писать という動詞を一つ取ってみても、他動詞として用いられることもあり (Он пишет письмо.)、非他動詞として用いられることもある (Мальчик уже пишет.)。さらに、生格を支配する動詞 (例えば нарвать, ждаль など) をどう解釈するかなども、微妙な問題であるように思われる。これは、他動性-非他動性の対立が語彙・文法カテゴリー (лексико-грамматическая категория) であり、Исаченко の指摘どおり (Исаченко/349-354)、このカテゴリーが形態論的指標によってではなく、個々の動詞の語義とその動詞の支配する格によって規定されるカテゴリーであるためである。

ところで、Jakobson の言うとおりの、格形態の体系のそれぞれの項に全体的意味があるのなら (Jakobson²/23-71)、動詞の語義と動詞の支配する格形態の関係は、動詞が一方的に格形態を支配するという関係ではなく、動詞の語義と格形態の持つ意味とが相互に作用するという関係であるように思われる。このことから、動詞のみに焦点を絞ると、他動性-非他動性の対立から、格形態という基準を排除することができ、他動性-非他動性の対立とは、動詞の語義とのみ関連するものであるとすることができる。すると、動詞のみに注意を向けた場合、そこには他動性-非他動性を表示する形態論的指標は存在しないわけであるから、形態論的には他動性-非他動性という対立自体が存在しなくなる。

反対に言う、形態論のレベルでは、全ての動詞（V）は他動詞にも非他動詞にもなる可能性を持っているということになる（以下の叙述では、形態論のレベルにおける意味カテゴリーとしての他動性－非他動性の対立を「他動性」－「非他動性」のように記すことにする）。

4. 仮定

以上の事情を考慮に入れると、先程の Jakobson による定式を、以下のように修正する必要が出てくる。つまり、V-ся - V という対立において、有標項である V-ся は、語彙・文法カテゴリーとしての非他動性を表示するのではなく、動詞の語義の「非他動性」を表示するのである⁸⁾。また、ここから -ся のみに注目すると、以下のように言うことができることになる。つまり、「-ся とは、形態論的観点から見ると、動詞の後ろに付くものであり、意味論的観点から見ると、その動詞の語義に「非他動性」という特徴を付け加えるものである」と⁹⁾。

ところで、既に軽く触れたのであるが、Jakobson によってロシア語の格形態の体系の構造が叙述されている (Jakobson²/23-71)。それによると、対格および与格は、「表示対象が何らかの動作行為を受けることを指示する」有標項として、それぞれ主格と造格に対立するとされている。つまり、簡単に言うと、対格および与格は、「被他動性」とでも名付け得る特徴を持っているというわけである。さらに、「対象に向かう方向性の存在はこれら2つの関係格 (=対格および与格) が前置詞と用いられた場合においてもはっきりと示される」とされている。つまり、対格および与格の持つ特徴は、前置詞の有無とは無関係ということになる。

以上の形態論および意味論の観点に立つ二つの定式から、светиться - светить の対立および дымиться - дымить の対立において、対格および与格との結合に関して、светить および дымить が何の制限も持っていないのに対し、светиться および дымиться は -ся の存在により何らかの選択制限を受けるという現象が現れることが予想される。

5. 方法

以上の仮定および予想を実証するために、既に触れた светиться - светить の対立および дымиться - дымить の対立を考察する。方法として、任意に取り出した文学作品におけるそれぞれの形態の周囲に現れる格形態を調べるとい

う作業を行った。データの出典としては、本稿の最後に挙げておいた文学作品の他に、Словарь современного русского литературного языка (АН СССР, 1950-1965) の светиться, светить, дымиться および дымить の項目に挙げられた用例がある。

原則として、用例において светиться, светить, дымиться および дымить の諸形態に隣接して用いられた意味的に関係のあり得る主格を除く全ての格形態の数をカウントした。

светиться, светить, дымиться および дымить が変化形 (спрягаемая форма) である場合、それが含まれる単文内にある全ての格形態の数をカウントした。文全体を修飾するいわゆる限定辞 (детерминант) であると解釈し得る格形態も、「80年文法」でも認められているとおり(「80年文法」/ § 2045)、その格形態が動詞に支配されている形態あるいは動詞に接続 (примыкание) している形態なのか、それとも文全体を修飾している限定辞であるのか形態論的に区別はできないので数に入れられている。次に、светиться, светить, дымиться および дымить が形動詞もしくは副動詞である場合、コンマで区切られている句の部分の中にある格形態がカウントされている。最後に、светиться, светить, дымиться および дымить が不定形である場合も、単文と同様の処理を行った。

ある格形態が、светиться, светить, дымиться および дымить と関係があるのか、それとも他の名詞と関係しているのか不明確な場合があるが、そのような格形態も動詞との関係を完全に否定できない場合、一つとカウントされている。また、светиться, светить, дымиться および дымить と並列関係に置かれるような同位成分があり、ある格形態がそのどちらと (もしくは文全体と) 関係を持っているのか不明確なときも、светиться, светить, дымиться および дымить との関係性を否定する根拠はないので、同様の処理が行われている。светиться, светить, дымиться および дымить に二つ以上の格形態が関係するときも、それぞれを一つと数えている。

結果を表にまとめた。参考のため、対格および与格以外の格に関するデータも挙げておく。なお、データの総数は、светиться が 77 例、светить が 94 例、дымиться が 52 例、дымить が 11 例である。дымить が極端に少数になっているが、дымить という形態は Пушкин によっては使用されておらず、また、今回調べた限りでは、Лермонтов のテキストにも Фет のテキストにも一度も現れなかったことから、比較的最近になって使用されるようになったものである可能性があるということを指摘しておきたい。

		светиться	светить	дымиться	дымить
生 格	φ				
	без		2		
	вокруг			1	
	до		1		
	из		1	1	1
	из-за		2		
	меж	1			
	от	1	2	2	
	с		1	1	
	среди	2	1		
	у	1	1	5	
与 格	φ	1	15	1	
	по	1	5	4	
对 格	φ				1
	в	2	12	1	
	на		6		1
	сквозь	3			
	через		1		
造 格	φ	14	22	4	7
	за	2		2	
	над	1	4	3	
	под	1	1	1	
前置 格	в	23	17	5	
	на	18	7	1	

表 (φ : 前置詞なし、空欄 : 用例なし)

6. 結果

6. 1. светиться - светить

本稿では、《в-対格》、《на-対格》、および前置詞なしで用いられる与格に注目したい。予想に反して、светиться が《сквозь-対格》と結合した用例があるが、これに関しては 8. で触れる。

まず《в-対格》は、светиться に 2 例、светить に 12 例用いられている。светиться - светить の対立においては、この数字だけで先程の予想のとおりになっているが、もう少し詳しく見てみると、その中で「時」を表しているものが、светиться に 1 例、светить に 2 例ある。

В такую минуту глаза у него светятся ласковой, умной улыбкой.

(そんなとき、彼の目は優しく知的な微笑みに輝く。) (17)¹⁰⁾

また、светиться のもう 1 例は、以下のものである。

Сам я невольно лицом обращаюсь к заливу.

Только вдали, потухая за дымкою сизой,

Весь в ширину он серебрянной светится ризой.

(私はふと入江に眼を向ける

青みを帯びた霞の向こうに消え入りそうな入江が
幅一杯に銀のリーザのように輝いている。)

(Фет/Морской залив/с. 223)

一方、светить に残った 10 例のうち 6 例が、《в окно (окна, окошки) (窓に)》という表現であり、4 例が《в стекла (ガラスに)》、《в воду (水に)》、《в горы (山々に)》、《в сумрак (暗闇に)》である。

Однажды ночью она проснулась. Снега тускло светили в окна.

(あるとき、彼女は夜中に目を覚ました。雪明かりがぼんやりと窓から射し込んでいた。)

(Паустовский/Снег/с. 297)

Светит в горы небо голубое,

Молодое утро сходит с гор.

(青い空の輝きは山脈に融け込み

若々しい朝が山々から消えていく。) (Бунин/Утро/с. 54/т. 1)

このように、今回の調査では《светиться в-対格》という結合は、対格に立つ名詞が、「時」という特徴でまとめられるいわゆる意味場に属し、《в-対格》という結合によって、「時」を表す副詞句を作るものと、в ширину (幅一杯に) という「程度」を表す副詞句を作るもの以外は、一例も見つけることが出来なかった。一方、《светить в-対格》という結合は、「свет が何らかの対象の中に射し込む」という風景を描き出すことができるということがわかる。特に《светить в окно (窓に光が射し込む)》という表現は、しばしば用いられるものであった。

次に、《на-対格》であるが、これは表にあるとおり、светиться と共に用いられた例はなく、一方、светить と共に用いられたのが6例である¹¹⁾。そのうち一つは《на утеху иностранцам (外国人を慰めるために)》という表現であるが、それ以外の5例は、《на лик (顔に)》、《на скалы (岩に)》、《на погост (墓地に)》、《на поля (野に)》、《на дорогу (道に)》となっており、《светить на-対格》という結合によって、「свет が何らかの対象の表面に照りつける」という風景が描かれていることがわかる。

Низкое солнце желто светило на пустые поля, лошади ровно
шлепали по лужам.

(低い太陽が人気のない野を黄金色に照らし、馬はリズムカルに水溜まりをピチャピチャいわせながら走る。)

(Бунин/Темные аллеи/с. 9/т. 4)

前置詞なしの与格は、светиться で1例、一方、светить で15例が使用されている¹²⁾。светиться と共に用いられている与格は、8。でもう一度詳しく見るが、それ以外の与格の用例は、светить と結合して、「свет が何らかの対象に向けられるようにして輝いている」という風景を描いている。

Зажег ты солнце во вселенной,

Да светит небу и земле,

Как лен, елеем напоенный,

В лампадном светит хрустале.

(なんじは宇宙の中に太陽を燃やし、
それは空と大地を照らす、
聖油を与えられた亜麻が
クリスタルガラスのランプの中で光るように。)

(Пушкин/Подражание конару/с. 355/т. 2)

もっとも、《светить 与格》は比喩的に用いられることも多く、人称代名詞二人称単数形 ты や《 глаза (目) 》や、また、かなり抽象的な表現である《 блаженство давных лет (遠き日々の至福) 》など、現実の世界では свет を発することのない対象を表す名詞が、主語となっている例もかなり見受けられた。

Я зову вас, целую землю, по которой вы ходили; куда бы я
ни смотрел, всюду мне представляется ваше лицо, эта ласко-
вая улыбка, которая светила мне в лучшие годы моей жизни ...

(ぼくはあなたの名を呼んだり、あなたの歩いた地面に接吻したりしている。どこを向いても、きっとあなたの顔が見えるんだ。ぼくの生涯の一ばん楽しかった時代を照らしてくれた、あの優しい微笑がね。...) (神西清訳) (Чехов/Чайка/с. 75)

6. 2. ДЫМИТЬСЯ - ДЫМИТЬ

先程触れたとおり、дымить は一般的にあまり使用されないため、светиться - светить の対立における場合ほど、数の上で明確な差は現れていない。とはいうものの、дымиться - дымить の対立においても、светиться - светить の対立における結果と同様の傾向は、はっきりと見られる。

まず、《в-対格》との結合であるが、これは дымиться および дымить を合わせても1例しかなく、それも、《в сумрачные дни (曇った日には) 》という「時」を表す表現である。

しかし、дымить に1例しかない《на-対格》は示唆的である。この用例では、дым が人形(実は、主人公である少年の死んだ妹)に振り掛けられているという風景が描かれている。

А потом, в солнечный морозный день с метелью, приехали на
трех розвальнях попы (...) и стали (...) ходить вокруг ле-

жашей на столе куклы, кланяться ей и дымить на нее из кадила.

((…)) それから、ときどき吹雪の舞う厳寒の晴れた日に、三台の百姓櫓で神父たちがやって来て、((…)) 机の上に横になっている人形の周りを回り始め、それにおじぎをしては、手提げ香炉の煙をその人形に浴びせかけ始めた。)

(Бунин/У истока дней/с. 440/т. 1)

さらに、Словарь современного русского литературного языка では、特殊な用法で дымить が前置詞なしの対格と結合することがあるとされている。

Искусные промышленники ловко дымят соболя шкурки и делают худых черными.

(熟練した手工業者は、クロテンの毛皮を上手にいぶし、悪い毛皮も黒くしてしまう。)

(17)¹⁰⁾

最後に、前置詞なしの与格であるが、これは дымиться に1例あるものの、常識的に考えて、この与格は дымить と関係しているのではなく、他の名詞 крови と関係しているとする方がよいと思われるので、考慮の対象からは除外する。

Я верю; здесь был грозный храм,

Где крови жаждущим богам

Дымились жертвоприношенья; (...)

(われは信じる。ここには恐るべき神殿があったと。

そこでは、貪欲な神への捧げ物である血が

湯気を立てていたと。((…)) (Пушкин/Челдаеву/с. 364/т. 2)

7. 考察

以上の結果から、次のように結論付けることができるかもしれない。つまり、「светиться および дымиться によって、свет もしくは дым が何の対象にも向けられていないという風景が描かれ、一方、светить および дымить によって描かれるのは、それらが比喩的に用いられた場合も含めて、свет および дым が何らかの対象に向けられているという状況である」と。言い換えると、

светиться および дымиться によって、動詞の語義の「非他動性」が表示されるのに対し、светить および дымить によって、動詞の語義の「他動性」が表示されるというように思われるかもしれない。これを便宜的に図で表すとすると、図3のようになるであろう。

しかし、これによって светиться, светить, дымиться および дымить の現実の用法が説明し尽くされているわけではない。свет および дым の「他動性」が感じられない светить および дымить の用例を探すのはいとも簡単である。

(...) только сидел он (=медвежонок) около калитки вверху на широкой заборной полке, над самой головой Алпатова, тепло, дружески урчал и светил глазами.

(子熊は木戸のところの幅広の屏の棚板の上、アルパートフのちょうど頭の上のところに座り、愛想よく親しげにのどを鳴らし、目を輝かせていた。) (Сергеев-Ценский/Медвежонок/с. 241)¹³⁾

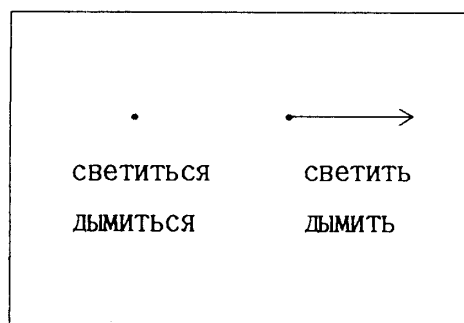


図3

すると、先程の定式および図を修正しなければならなくなり、少なくとも、светиться - светить の対立および дымиться - дымить の対立においても、4. の第一段落で述べた -ся に関する定式の正当性が立証されるように思われる。

つまり、светиться および дымиться においては、全ての動詞 (V) の語義に付随する可能性のある「他動性」が、-ся の付くことにより打ち消され、一方、светить および дымить においては、その「他動性」の存在の可能性が打ち消されることなく保持されるということが出来るわけである。

言い換えると、-ся の意味論的機能は、全ての動詞 (V) の語義に付随し得る

「他動性」を失わせるというものであると言える。上の図に倣ってこれを図示すると図4のようになるであろう (図中の点線は存在の可能性を表す)。

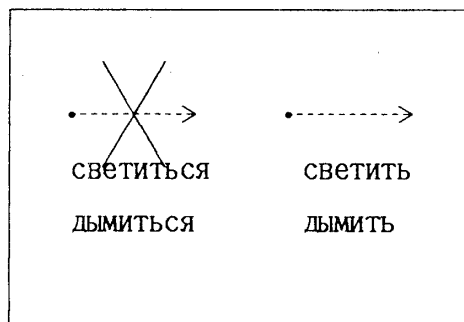


図4

8. светиться, светить, дымиться および дымить の具体的用法

以上で、светиться - светить の対立および дымиться - дымить の対立の意味論的差異の考察の枠組みは整った。それでは、このような枠組みの中で、具体的にこれらの形態がどのようなニュアンスを表現し得るのかを、Gerritsen の指摘を参考にしながら、最後に簡単に付け加えておきたい。

Gerritsen は、既に 2. で触れたとおり、Янко-Триницкая および Мучник と同様に、светиться と светить の選択の基準を、これらの形態が変化形である場合、その主語となる名詞の表す対象の性質に帰している (Gerritsen/43-44)。つまり、自ら свет を発することのできる対象を表す名詞が主語となっている場合に светить が用いられ、一方、светиться は、「光を発する何かは自らを見せる (show itself)」ということを表すとしている。実際、今回調べたデータによっても、светиться および светить の主語を調べてみると、светиться の主語となるものには、солнце (太陽) や луна (月) のような自ら свет を発する対象を表す名詞が多く、一方、светить の主語となっているものは、глаза (目) などの свет を受けて光る対象を表す名詞が多くなっている。しかし、この事実は 7. の図式から導き出せ、また、筆者にはこの方が説明として、論理が通っているように思われる。

また、Gerritsen は、「Луна светит という言表は、(…) 周囲が見えるようになるという効果を伴うことがある」と指摘しているが、それはまさにそのとおりで、これも 7. の図式から導くことができる。ちなみに、6.1. で挙げた Паустовский による用例も、次のように続けられている。

Однажды ночью она проснулась. Снега тускло светили в окна.

На диване всхрапывал серый кот Архип, (...)

(あるとき、彼女は夜中に目を覚ました。雪明かりがぼんやりと窓から射し込んでいた。ソファには灰色猫のアルヒーブがいびきをかいていた (…)) (Паустовский/Снег/с. 297)

一方、дымиться - дымить の対立について、Gerritsen は次のように説明している。つまり、「差異は、煙の源 (origin) の差異と関連しているように思われる。つまり、Vは主語によって煙が生み出されているときに用いられ、V-ся は主語によって煙が放出されているのみであるときに用いられる」と。そして、これとの関連で、「(…) дымить は、否定的な含意 (negative connotation) を持っている。つまり、煙を出すことは、その文の発話者にいらいらさ

せるような効果 (irritating effect) を与える」と。このことも、先程の 7. の図式で説明でき、さらに、次のような用例も実際にある。

Как ни старались люди, собравшись в одно небольшое место несколько сот тысяч, изуродовать ту землю, на которой они жались, (...) как ни дымили каменным углем и нефтью, (...) — весна была весной даже и в городе.

(何十万という人びとが、あるちっぽけな場所に寄り集まって、自分たちがひしめきあっている土地を醜いものにしようとどんなに骨を折ってみても、(…) 石炭や石油の煙でどんなにそれをいぶしてみても、(…) —— 春は都会のなかでさえやっぱり春であった。) (木村浩訳) (Толстой/Воскресение/с.6)

以上のように、светиться - светить の対立および дымиться - дымить の対立を形態、意味、および用法の観点から見てきた。しかし、任意の形態の意味および用法は固定的なものであると考えることは誤りであろう。実際の言語活動においてある形態が選択されるときには、様々な要因が関与しているのであり、また、それによって様々な新しい表現が可能となる。そのような例として、светиться と 《сквозь-対格》の結合した用例や светиться と与格の結合した用例を挙げるができると思われる。

Погода была странная. Сероватая муть покрывала небо, солнце светилось сквозь нее бледным пятном; (...)

(奇妙な天気だった。灰色がかったもやが空を覆い、太陽はその向こうで青白い点となって輝いていた (…))

(Вересаев/В сухом тумане/с.205)

Чудной сказкою тянулись

Замки, горы мимо нас

И светились мне навстречу

В паре ясных женских глаз.

(夢物語のようにいくつもいくつも城や山が私たちを通り過ぎて行ったそして私の方に向かって女性の二つの目が輝いた。)

светиться は、7. で見たとおり свет が対象に届かないことを表示している
のであり、この場合、《странная погода》を表現するにあたり、светить より
も светиться の方が適当であると作家は考えたと推測できる。また、свети-
ться, светить が変化形であり、その主語が свет を何らかの対象に向けて発
することのない対象を表す глаза (глазки, взор)(目、視線)などの名詞であ
るときには、予想されたとおり、светиться が用いられることが多く、上の用
例においても同様の意識が作家に働いたと憶測することが可能である。

このような、светиться - светить および дымиться - дымить の用法の微
妙なニュアンスについて、機会があれば、別のところで詳しく記述してみたい
と思う。

9. 結び

ロシア語の相のカテゴリーに関しては、最初に触れたとおり、意見の一致が
見られていない。本稿ではV-ся - Vという対立の一例として светиться -
светить の対立および дымиться - дымить の対立を見てみた。形態と意味と
いう観点からすると、少なくとも今回取り上げた例に関しては、V-ся - Vと
いう対立を、カテゴリーとして認めるべきであるように思われる。この例で他
の全てを一般化することはできないが、本稿が相のカテゴリーの整備の一役を
担うことを期するものである。

本稿は 1991 年ロシア文学会で発表したものに、新たに見つ
かったデータを加えて、考察をしたものである。

注

1) 相のカテゴリーの研究の歴史についての概観は、Виноградов によって
与えられている (Виноградов/491-511)。

2) V-ся およびVが個別の独立した動詞なのか、それとも一つの動詞の二
つの形態であるのかという問題もあるが、ここではその議論には立ち入らず、
後者の立場で論を進めることにする。

3) 例えば、次のような用例。

Царю он честно послужил,
Сердечно ближнего любил,
Был уважаем от людей...

(彼はツァーリに忠実に仕え、
隣人を心から愛し、

人々から尊敬されていた・・・。) (Бунин/Деревня/с. 107/т. 2)

4) 上の注と同様に、完了体であるV-сяにより「受動」が表されているように思われる用例を挙げておく。

Но вдруг она (=погода) переломилась, — сменилась бурей,
ливнями, а в Дурновке случилось нечто совершенно неожиданное.

(しかし、突然天気は急変した、— 嵐と豪雨にとって代わられたのだ。そして、ドゥルノーフカでは全く予期せぬことが起こった。)

(Бунин/Деревня/с. 121/т. 2)

5) もっとも、これに異議を唱える興味ある研究もあるが(Буторин/125-136, 神山/ 19-28)、V-сяに支配される対格補語は、その語尾が -у となる女性名詞(もしくは女性名詞と同じ変化をする男性名詞)に多いなど、これは名詞の格形態の体系を考慮に入れなければならない、別の問題として扱うべきであるように思われる。

6) 先に断ったとおり、ここでは形動詞は考慮から除外する。

7) ちなみに、この Jakobson の定式に従って、相のカテゴリーを記述しているのがプラハで出版された《Русская грамматика》である(《Русская грамматика》/ § 350-381)。

8) 一般的によく言われる、他動詞に -ся が付くことによりその動詞が非他動詞になるという事実は、この意味論レベルの原理によって生み出されている現象であるとすることができる。また、注の5)で触れた現象も、格形態とこの定式の相関関係によって説明することが可能であるように思われる。

9) 本稿では、論を進めるために Jakobson に倣って -ся の意味論的機能を本文のように規定したが、このような固定的な規定で形態素の意味を記述できるという考え方には疑問が残るということを付け加えておく。

10) Словарь современного русского литературного языка より。

11) 《светить на-対格》は、Словарь современного русского литературного

языка の светить の項にも登録されている。

12) 《светить 与格》も、Словарь современного русского литературного языка の светить の項に登録されている。

13) この用例のすぐ近くに同一の状況を表現していると思做してよいと思われる部分があるので、念のため挙げておく。

(...): медвежонок ... сидел, при луне весь отчетливо черный, на полке забора возле самой калитки; смотрел, пригнув голову, на Алпатова, и глаза светились, как две снежинки.

((...)) 月の光に全身くっきりと黒いことが見て取れる子熊は、木戸のそばの塀の棚板の上に座っていた。頭をかしげてアルパートフを見ており、その目は二つの雪の結晶のように輝いていた。

(Сергеев-Ценский/Медвежонок/с. 240)

出典

Словарь языка Пушкина (АН СССР, 1956-1961) をもとに調べた Пушкин (Полное собрание сочинений, т.1-9, 12, АН СССР, 1937-1949) による用例
М.Ю.Лермонтов, Сочинения, т.1, (изд-во «Правда», 1988) に収録されている詩における用例

А.А.Фет (Библиотека поэта, изд-во «Советский писатель», 1986) に収録されている詩における用例

И.А.Бунин (Собрание сочинений в четырех томах, изд-во «Правда», 1988, с.21-164, т.1) に収録されている詩における用例。

《Слово о полку Игореве》(Библиотека поэта, изд-во «Советский писатель», 1985) に収録されている、原文 “Солнце светится на небесе,, (最後から2つめの段落) に対応する部分の諸現代語訳における用例。

Бунин, И.А.; Антоновские яблоки, Велга, Господин из Сан-Франциско, Далекое, Деревня (1), Кавказ (в сб. «Темные аллеи»), Надежда, Осенью, Птицы Небесные, Сны, Сны Чанга, Темные аллеи (в сб. «Темные аллеи»), Эпитафия (Собрание сочинений в четырех томах, т.1-4, изд-во «Правда», 1988).

Вересаев, В.В.; В сухом тумане, Загадка, Записки врача (1) (Собрание сочинений в пяти томах, т.1, изд-во «Правда», 1961).

Иванов, В.В.; Партизаны (Собрание сочинений в восьми томах, т.1,

Гос. изд-во художественной литературы, 1958).

Гаршин, В.М.; Художники, Четыре дня (Рассказы, изд-во «Советская Россия», 1976).

Горький, М.; Жизнь Клима Самгина (часть 1-я, гл.1) (Полное собрание сочинений, т.21, изд-во «Наука», 1974).

Паустовский, К.Г.; Снег (Собрание сочинений в Девяти томах, т.6, изд-во «Художественная литература», 1983).

Сергеев-Ценский, С.Н.; Верховод, Медвежонок (Собрание сочинений в десяти томах, т.2, Гос. изд-во художественной литературы, 1955).

Толстой, А.К.; Царь Борис (действие 5-е) (Собрание сочинений в четырех томах, т.2, Изд-во художественной литературы, 1963).

Толстой, Л.Н.; Воскресение (часть 1-я, I) (изд-во «Прапор», Харьков, 1986).

Чехов, А.П.; Дядя Ваня, Чайка (Пьесы, изд-во «Русский язык», 1989).

文献

Грамматика русского языка, АН СССР, 1960.

Русская грамматика, Akademia Praha, 1979.

Русская грамматика, АН СССР, 1980 (本文では「80年文法」と表記).

Буторин, Д.И., Об особых случаях употребления винительного прямого объекта в современном русском литературном языке, в кн. Нормы современного русского литературного словоупотребления (ред. Качевская, Г.А., Горбачевич, К.С.), 1966.

Виноградов, В.В., Русский язык, изд. 3-е, 1986.

Исаченко, А.В., Грамматический строй русского языка в сопоставлении с словацким, часть 2-я, 1960.

Ломоносов, М., Российская грамматика, 1755 (Reprinted in Leipzig, 1975).

Мучник, И.П., Грамматические категории глагола и имени в современном русском литературном языке, 1971.

Потебня, А.А., Из записок по русской грамматике, 1977.

Фортунатов, Ф.Ф., О залоге русского глагола, Отд. оттиск из Известий ОРЯС АН, т. IV, кн. 4, 1899.

Холодович, А.А., Залог I: Определение и исчисление, в кн. Проблемы

грамматической теории (Холодович, А.А.), 1979.

Янко-Триницкая, Н.А., Возвратные глаголы в современном русском языке, 1962.

Gerritsen, N., Russian Reflexive Verbs, 1990.

Harrison, W., Expression of the Passive Voice, In: Studies in the Modern Russian (ed., Ward, D.), 1967.

Jakobson¹, R., Zur Struktur des Russischen Verbums, In: Selected Writings, II, 1971 (ロシア語動詞の構造について、「ローマン・ヤーコブソン選集1」の中に収録、1986).

Jakobson², R., Beitrag zur allgemeinen Kasuslehre: Gesamtbedeutungen der russischen Kasus, In: Selected Writings, II, 1971 (一般格理論への貢献、「ローマン・ヤーコブソン選集1」の中に収録、1986).

神山孝夫、-ся 動詞伴う対格補語について、「言語・文化研究I」(1990)に収録。